a.b.c. 2012 Spring
architectural bulletin of chikurikai
築理会報 2012 春号　2012 年 04 月発行　Vol.49
東京理科大学工学部一・二部建築学科築理会事務局

■平成 24 年度築理会

総会・講演会・懇親会のご案内

築理会会員の皆様におかれましては御健勝のこととお慶び申しあげます。下記のとおり、今年も築理会最大のイベントである「総会・講演会・懇親会」を開催いたします。

特に、今年の講演会は、藤嶋昭東京理科大学学長をお迎えしての講演会です。御専門の「光触媒」を例にどの様な内容か、「百聞は一見に如かず」、奮ってご参加下さいますようご案内いたします。

記

1．日　時：平成 24 年 5 月 12 日（土）
　総　会：午後 2:30 ～午後 3:00
　講演会：午後 3:00 ～午後 4:10
　懇親会：午後 4:30 ～午後 6:00

2．会　場
　総　会：講演会　神楽坂校舎 1 号館 17F 講堂
　懇親会：PORTA 神楽坂　6F

3．催物概要
・講演会
　「研究は楽しく感動しながら」
　　―　光触媒を例にして　―
　　東京理科大学　学長　藤嶋　昭
・懇親会場で築理会員著作による本の紹介と販売

4．会費：一人 4,000 円

5．出欠連絡　出席の方は下記宛に「氏名・連絡先」を 4 月 27 日までにメールまたは FAX にてご連絡ください。

築理会顧問　石神一郎
E-mail：godhopping@yahoo.co.jp
FAX：03-34-1164

昨年の懇親会の模様

■工学部 50 周年　5 月 20 日に記念式典

昭和 37 年、東京新宿区神楽坂に産声を上げた工学部は今年 50 周年を迎えます。

これを記念し、ホテルグランドパレス（東京都千代田区）で記念行事を挙行する運びとなりました。行事の概要は下記のとおりです。

記

第一部　記念式典
　期　日　平成 24 年 5 月 20 日（日）14 時～ 16 時 30 分
　会　場　ホテルグランドパレス　ダイヤモンドルーム
　　東京都千代田区飯田橋 1-1-1
　内　容　理事長並びに学長からの祝辞
　　記念講演会「はやぶさ成功の秘話（仮題）」
　　JAXA 川口淳一郎教授
　　工学部今昔物語　本学工学部卒業生　ほか

第二部　祝賀会
　期　日　平成 24 年 5 月 20 日（日）14 時～ 16 時 30 分
　会　場　記念式典会場に同じ

参加申し込みはホームページから
URL:http//www.50aniv.eng.tus.ac.jp

■建築学科の 50 周年行事

―2013 年葛飾キャンパスで？―

工業化学科、電気工学科とともに新宿区神楽坂に誕生した建築学科も今春創設 50 周年を迎えます。

現在、建築学科において記念行事を検討中とのことです。開催時期は平成 25 年、会場は完成間もない葛飾キャンパスとなる見込みです。

今後、築理会としても建築学科と歩調を合わせ実りある記念行事となるよう可能な限り協力したいと考えていますので、会員各位のご協力をお願いします。本誌秋号において記念行事の詳細をお知らせできるものと考えています。

リニューアルしてきれいになった 1 号館

フォトルポ／2011年度築理会賞

2月25日、築理会賞の審査会が東京理科大学九段校舎で行われた。2011年度の工学部I部建築学科4年生の卒業制作を対象に、同学科OBで、現役で設計活動に携わる審査員が最も優れた作品を選ぶ。今年で4回目となる。

対象は教員の採点によって選ばれた12人の卒業制作。審査に先立って卒業制作講評会を開催。学生がプレゼンテーションし、教員やOBの審査員、ゲストとして加わった非常勤講師などが次々と質問しながら講評を述べた。築理会からは林孝夫会長（1969年卒）や石神一郎前会長（1970年卒）などが参加した。

卒業制作講評会の冒頭で学科主任の栗田教授が開会の挨拶をした

3作品ずつ模型を中央に並べて講評をしていった。模型の周囲をコの字形に席が囲むように配置している。司会は宇野教授が務めた

OBとして築理会賞の審査に当たったのは5人。薩田英男氏（薩田建築スタジオ）、佐藤勉氏（駒沢女子大学准教授）、川辺直哉氏（川辺直哉建築設計事務所）、加藤征寛氏（MID研究所）、野田郁子氏（三菱地所設計）という顔ぶれだ。薩田氏が審査員長を務めた。

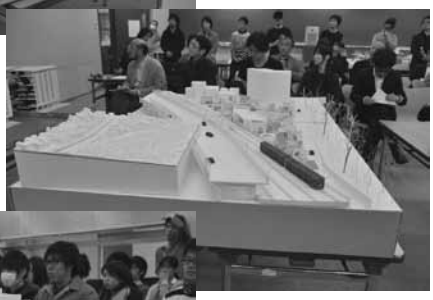
一次投票では各人が優れていると評価した作品に、3票を目安に投じた。3票以上入ったのは次の4作品。太田寛君の「Intervention―日生劇場増築計画―」（3票）、並木裕之君の「風景の抜け道―都市の断片のコラージュ―」（4票）、野田啓介君の「石の時間　採石場跡地に建つ書庫」（5票）、金司寛君の「THIS IS NOT MIES」（3票）。

最終投票やディスカッションを受け、審査員長の薩田氏による最終判断で、野田君の作品を築理会賞にすることが決まった。採石場の跡地を書庫とし、長年の間に土砂に覆われて保存されていくという提案。土砂の上を緑が包み込みランドスケープも形成される。教員の採点によって選ばれた卒業制作賞も野田君の作品だった。

約1週間後の3月3～5日に行われた「せんだいデザインリーグ2012卒業設計日本一決定戦」でも理科大工学部は奮闘。太田君、野田君、金君のほか、米田祐太君の「sense of distance box―想像を喚起する距離―」が上位100選に入った。皆さんの今後のさらなる飛躍を期待したい。

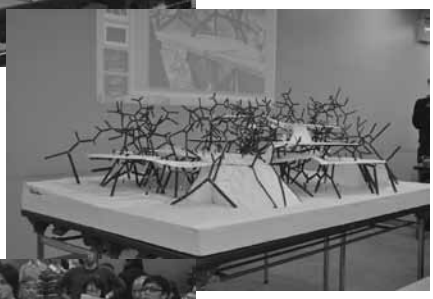
（森清＝I部1985年卒、会報委員会）

1. 太田寛君の「Intervention―日生劇場増築計画―」



2. 大塚悠太君の「都会村」

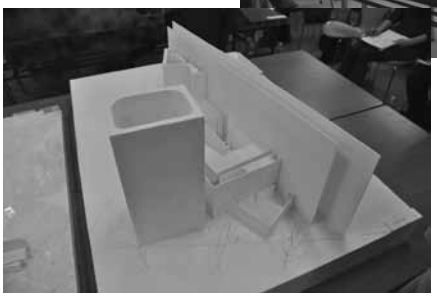
3. 加藤雅大君の「Complex Connection」



4. 工藤俊輔君の「NON-CLOSED LINE」

5. 小島啓輔君の「解かれる面、紡がれる線」

6. 高橋智子さんの「ハケニワストラクチュア」



7. 並木裕之君の「風景の抜け道―都市の断片のコラージュ―」

8. 野田啓介君の「石の時間　採石場跡地に建つ書庫」

9. 堀切佐和子さんの「HIROKOUJI」

10. 本間祐太郎君の「Dancing Layer」

11. 米田祐太君の「sense of distance box ―想像を喚起する距離―」

12. 金司寛君の「THIS IS NOT MIES」

審査に当たった5人のOB。右手から順に薩田英男氏、佐藤勉氏、川辺直哉氏、加藤征寛氏、野田郁子氏

築理会賞に輝いた野田君の「石の時間　砕石場跡地に建つ書庫」

左手が野田啓介君。築理会賞と卒業制作賞をダブル受賞した

築理会賞受賞おめでとう

平成24年3月18日（日）、東京・九段の日本武道館において東京理科大学の学位記授与式・修了証書授与式が挙行され、学部3,978名、修士1,417名、博士59名、専攻科21名の計5,463名が卒業・修了しました。この中には、築理会会員となる1部卒業生103名、2部卒業生76名、修士修了生（工学研究科建築学専攻）52名が含まれています。

九段キャンパスの建築学科教室で行われた学位記並びに修了証書の授与に引き続き、学業成績優秀者並びに卒業制作（設計）優秀者に対し林会長から築理会賞が授与されました。受賞者4名は次の方々です。（敬称略）

工学部第1部建築学科
三富 遼太（ミトミ リョウタ）学業成績優秀
野田 啓介（ノダ ケイスケ）卒業制作優秀

工学部第2部建築学科
金沢 将（カナザワ ショウ）学業成績優秀
荻野恵美（オギノ エミ）　学業・卒業設計優秀

4名の方々、受賞おめでとう。

三富さん

野田さん

荻野さん

今後益々のご活躍と、併せて惜しくも賞を逃した方々の今後のご健闘とご活躍を祈念いたします。

（なお、当日所用のため築理会賞の授与ができなかった金沢さんには日を改めて賞をお届けしました）

■築理会も40年の歴史を重ねています

昭和37年（1962年）に工学部建築学科が創設されてから10年目の昭和46年、本学建築学科を卒業した助手、大学院生を中心とした数十名の有志の発意により築理会が発足しました。

平成23年で40年目に入り、今春の卒業生（1部47期、2部33期）180名を含め概ね6850名の会員を擁する同窓会に成長しました。

活躍する学生

農業・エネルギーから防災計画、古民家再生まで、幅広い分野で社会とのつながりをもちながら活躍する人材が出てくることはうれしい限りです。建築の枠にとどまらず、どんどん活動の幅を広げてください！

社会情勢とのつながり領域で縦横無尽に

山名研究室　波利摩星也

昨年度は論文やコンペがいくつか入賞しまして、様々な方から感想を頂きました。まずご覧頂いた皆様に感謝申し上げます。

■予想だにせず評価された論文

昨年度の大きな出来事は、論文が野村総研のコンペに入賞したことです。自分でも全く予想していませんでした。大学での研究とは全く関係のない書き下ろしの論文で、「農業の副産物からエネルギーを抽出し、都市やインフラを動かす」という趣旨です。農業では野菜の廃棄などが大量に出ます。これは捨てられるとメタンガスが発生し良くないことが起こりますが、回収して燃料とすることも出来ます。それを水素自動車や水素電車などのインフラで実現していきましょうよ、という流れです。「環境都市」やら「日本の経済」やら、ずいぶん偉そうなことを言った気がします。

これを書いたのは2011年の9月頃なのですが、その頃は東北の復興がどうなるか不透明な状態でした。その中で論文を書いた動機は被災地の復興プランを提案出来ないか、という何とも差し出がましい気持ちでした。でも震災から半年も経たない時期で「被災地をネタにして良いのだろうか」という気持ちが強くあり、復興云々は文中では触れていません。それが11月頃に野村総研の人から、被災地をテーマにしても良いのでは、と言われたのでそれからは復興プランであると公言しています。聞けば、被災地の人々が観光気分でも良いから東北に来て、自分たちに関心を持って欲しいと言っているそうです。

ともあれ、この論文を書いてから建築と社会情勢のつながりを強く感じるようになりました。同時に修士論文へのプレッシャーになっていることも（笑）

■実現可能性を考えてコンペをする

コンペでもアイデアを投げっぱなしではなく実現まで続けることを考えています。提案して終わりでは嫌で、アイデアを現実に当てはめて育てる過程が一番楽しいんです。

受賞後も続いているのは２つありまして、一つは昨年夏に入賞した京都の防災計画の提案コンペです。京都は木造密集地が多く、地震時には火災の危険性が極めて高い場所があります。このコンペの対象地はそうした土地を流れる川、といっても人工的に整備された親水空間なのですが、ここを利用して防災の仕組みをつくれないか、というのがテーマです。そこで京都の人たちが自ずと水辺に集まるコミュニティを持っていることに着目して、親水空間で農業や樹木の育成を行うことで放水設備のメンテナンスを兼ねた防災コミュニティをつくる提案をしました。これは４月初めに地域住民を交えたパネルディスカッションを行います。実現に向かっている感じがいいですね。

もう一つは長野の古民家再生計画。これは今年初めに入賞したコンペですが、老朽化して使われていない古民家を地域の観光資源として使う方法を提案しました。歴史的な観点から古民家を修復するのは当然ですが、それに加えて「建築とITの融合」を試行するつもりです。「伝統建築＋先端技術」と銘打って、仮想社会サービスというWeb上の仮想コミュニティで、都市部と地方都市のコミュニティをつなげるという提案をしています。もともとこの主催者である自治体では都市部からの移住者やセカンドハウス需要を見込んでいたので、この仕組みによって地域間の人口を流動化させることを意図しています。この無謀な計画がやたらと盛り上がってしまったので、古民家の改修を含めて４月から予算がつき実施に向かうことになりました。

もはや、建築とは関係ないですね（笑）君はどこに向かうんだ？　と言われることもあります。でも建築と関係ないもの（ないと思われているもの）を融合させた提案は面白くなることがある。周囲が熱心に設計している間に、こんなことばかり考えている自分はズレているんだなあという自覚はあります。

■今後の課題

コンペが終わった後に案の未熟さに気付いて意気消沈することが多いです。もっとスタディをしておけば良かった、と思うのですが完璧な作品は不可能です。

自分の弱点はグラフィックが下手なことです。恥ずかしながらここ最近の作品を見ていると絵より文章で表現した方が評価は高い、という建築学生にあるまじき事態です。ここは何とかしていきたいと思います。

そんなこんなで、修士１年は学部時代に考えていたことを外部に発信していく一年でした。ここまでいろいろと出来るのも、自由にさせてくれる研究室の雰囲気のおかげだと思います。残り１年をきった学生生活ですが、挑戦出来ることがあればもっとやっていきたいです。

真鍋先生、退任記念

お疲れ様でした、そして、ありがとうございました

深野有紀（Ⅰ部 2000 年卒）

39 年にわたって教鞭をとられた真鍋恒博教授が、今年3 月をもって工学部建築学科を定年にて退任される。3 月 24 日には、真鍋先生へのこれまでの感謝の気持ちをこめて研究室 OB 主催の退任記念行事が行われた。神楽坂校舎一号館の記念講堂で開かれた記念講演会には、卒業生、現役理科大生、先生、大学関係者、企業・団体関係者など、様々な形で真鍋先生と時間を共有したたくさんの方々が集まり、会場はほぼ満席となった。

真鍋先生の“変遷史”を大公開

真鍋先生は、東京大学工学部建築学科卒業後、同大学院内田研究室で博士課程を終え、1973 年から東京理科大学工学部建築学科の専任講師に着任、研究室を開設して以来、一貫して「建築構法計画学」を指導してこられた。74 年に博士号取得、75 年に助教授、93 年に教授となられ、2000 年には「建築構法計画学に於ける構法の体系化に関する一連の研究」で日本建築学会賞を受賞している。研究室の門下生は現役も含めて500 人を超える。

記念講演会では、真鍋先生が建築を目指したきっかけから 39 年間の真鍋研究室の成果までを総括。卒業生にとって記憶に鮮明な夏休みの構法模型の課題や図学演習の話も登場し、大学時代の思い出が一挙に蘇ってきた。

研究生時代には面白半分に聞いていた真鍋研究室の標語（例えば、「4. 突然の三分間スピーチ」とか「76. 原稿見ないで発表せよ」とか、番外編合わせて計 136 カ条！）は、社会人になった今読んでも「うーん」と頷かされるものばかりだ。思えば、コピーの取り方から会議のやり方、書類のまとめ方まで、社会人として「（本来は）当たり前にやれなきゃ困ること」は、真鍋研究室でいつの間にか勉強させていただいた。なんとか社会人としてイッパシに仕事ができているのも、真鍋先生のおかげなんだと痛感する。

貴重な知見を早口で一挙に展開し、歯に衣着せぬ発言で時折、裏話も飛び出すいつも通りの“真鍋節”はなお健在で、一時間半にわたる記念講演会は、幾度も笑いが沸き起こっていた。そして、教育や学問に対する真鍋先生の熱意と愛情を改めて感じさせていただいた。

引き続き学士会館にて記念懇親会が開催され、約260 人の参加者で会場はいっぱいに。主賓スピーチでは、今度は真鍋先生のプライベートの変遷史を講義形式で大公開。絵画や音楽から自転車や山スキー、鉄道と、多彩な趣味とどんなことでもとことん追求するエネルギーには脱帽するばかりだった。

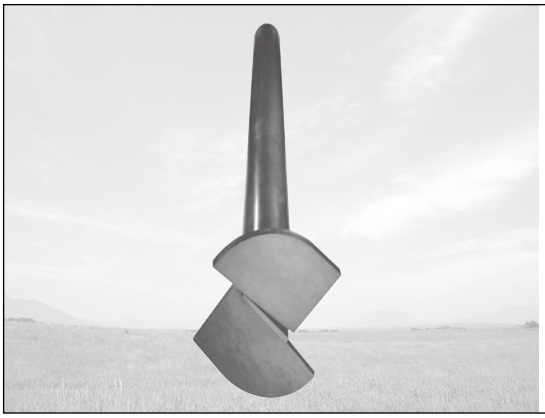
最後に、真鍋先生に旅行券、奥様に花束が贈呈され、真鍋先生恒例の記念撮影で締めくくりとなった。

研究室 OB 代表メッセージ

安井建築設計事務所取締役社長
佐野吉彦氏（Ⅰ部 1979 年卒）

真鍋先生の退任記念行事の準備を、先生自身と現役とＯＢとで一緒に進めてきました。記念講演の中身は先生にお任せするとして、運営体制や記念の配布物やパーティでの展示パネルなど、いろいろな知恵を絞りました。おおよそ、1 年間のあいだ、真鍋研究室に受け継がれてきた歴史的遺産を探り当てる楽しい旅をしてきた気分です。先生の著書「建築ディテール基本のき」も記念行事に間にあいましたし、和やかかつ濃厚な一日になりました。研究室が使命を終えるのはさびしいものがありますが、真鍋先生のエンジンはまだまだ健在です。ぜひこの大きなＯＢ／ＯＧの輪を大事にしてゆきたいと思います。

真鍋先生、長い間、ありがとうございました。
ますますのご活躍を祈念いたします。



目に見えない支える技術こそが大切だと考える。

回転貫入鋼管杭ジー・エクス・パイル
G-ECS PILE®
http://www.sansei-inc.co.jp
営業品目：建築工事における基礎杭の開発・販売・施工/建築工事における各種杭の技術提案
※　技術開発スタッフ募集中

株式会社 三誠
SANSEI INC.
本　社　東京都中央区日本橋箱崎町4番3号　国際箱崎ビル3階　TEL:03-3639-5226　FAX:03-3639-8162
関西営業所 / 北関東営業所 / 新潟営業所 / 東北営業所 / 茨城営業所
（昭和48年　工学部建築学科　代表取締役　三輪富成・専務取締役　小川ひろし　他2名）

「同窓の輪①竹中工務店」

竹中理窓会会長　増村　清人

築理会報の企画のうち、『同窓の輪』という初めての企画で「竹中工務店理窓会」掲載のお話をいただき、非常に光栄に存じます。竹中工務店理窓会は平成24年3月現在で185名が在籍しております。所属部署としては作業所と設計が多いですが、海外・開発・技研そして執行役員と多方面で活躍をしており、竹中工務店の中で存在感が近年富に増してきております。

竹中工務店は、「最良の作品を世に遺し、社会に貢献する」という経営理念を一貫して掲げ建築専業で創業402年になります。近年、社会環境の変化とともに、建築に対する価値観が大きく低下しているような気がします。しかし、「人への優しさ」、すなわち「共生」「安心」「幸せ」「喜び」「育み」「再生」「伝統」・・・建築に対するこれらの「想い」は将来も普遍であると思われます。竹中は今後もこうした視点に立ち、新たな建築の創造を通じ、理想の都市・社会づくりに向けダイナミックな活動を展開していきます。

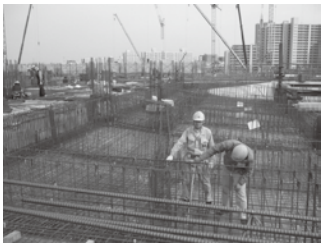
「竹中工務店理窓会」はその理念をベースに活動をすすめています。近年、同窓会活動は活発になっており、年2～4回程度の会合を開き、交遊と交流を深めております。

2010年10月31日に行われました「ホームカミングデー」においては、理窓会紹介コーナーとして初めて「竹中工務店理窓会」の紹介展示をいたしました。竹中工務店に在籍している東京理科大学卒業生ＯＢの多方面の活躍について、実際卒業生が手がけた仕事（作品）を、「デザイン」「環境配慮」「建築再生」の３つのテーマで、建築に対する「想い」を語りパネル紹介いたしました。パネル作成、パネラーなどすべて竹中工務店理窓会メンバーで行い、当日は多数の来場者へ我々の「想い」を伝えることができました。

「創立125周年記念事業」を推し進められております東京理科大学の「想い」を実現する一環として、竹中工務店は神楽坂校舎で1,2,3,6,7,8,9号館の改修工事、長万部校舎においては女子寮の建替工事をさせていただきました。現在、葛飾校舎では大学の顔となる図書館・集会場棟を施工、野田校舎では将来、藤嶋学長が長年研究されている光触媒のメッカとなる「光触媒総合システム研究センター」の実施設計を行っています。今後も、建築を通して母校全体の施設最適化のお手伝いができればと念じてやみません。

社会の中で、「建築」が相対的に地位低下していますが、建築の専門家としてより創造的な分野に国内・海外の区別なくチャレンジし新たな価値を生み出したいと思います。そのときに、竹中だけでなく理科大・築理会のつながり・ネットワークを活用して、皆様と一緒に良い仕事ができれば最高の喜びです。

これからも引き続き、永くお付き合いさせていただきたいと思います。



平成23年度　1級建築士 取得者
V9 9年連続
関東1都3県 合格者占有率 No.1
総合資格学院
関東1都3県 合格者占有率
関東1都3県（東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県）
合格者 2,017名中 当学院受講生 1,107名
54.9%
1級建築士
他講習利用者＋独学者
総合資格学院受講生
※総合資格学院の合格実績には、模擬試験のみの受験生、教材購入者、無料の役務提供者、過去受講生は一切含まれておりません。※都道府県合格者および卒業学校別合格者数は、(財)建築技術教育普及センター発表による。＜ 12月15日現在 ＞
平成23年度 77名 合格！
東京理科大学 卒
総合資格学院 現役受講生
59.7%
東京理科大学 卒業合格者129名中 当学院合格者77名
総合資格学院
開講講座
無料体験入学 実施中!!
お問合せはこちらから!!
03-3340-2810
建築士
施工管理技士
宅 建
インテリアコーディネーター
www.shikaku.co.jp
総合資格
検索

活躍する卒業生

坊ちゃん賞を受賞した中西繁画伯のアトリエ訪問

何を描くのか？

春といっても、まだ肌寒い風の吹く横浜・元町のアメリカ山を登った。建築学科４期生 (1969 年卒)、洋画家中西繁氏のアトリエは外人墓地近くのマンションの１階にあった。油絵の具の匂いのなかに建物スケルトン一杯の南三陸町の瓦礫の惨状が目に飛び込んできた。現在制作中の作品で中西氏が「正と負の遺産」を描くことを信条としていると語った、負の部分にあたる作品だ。

何を描くことをテーマとしているかという質問に、明快に答えた信条は実に建築家らしいものであった。人類が残したもの、あるいは生み出してしまったなかには正と負があり、正の部分ではヨーロッパの街並みなどがある。これらの作品は「ランド・スケープ」と呼び､負の部分ではチェルノブイリなど「棄てられた街」シリーズと呼んでいるとのことであった。

大学を卒業して、53 歳まで東急設計コンサルタントで東急ハンズや亜細亜大学図書館などを手掛け、目黒駅ビルの設計を最後に退社して画業一本に絞ったということは、30 年間設計をやっているわけで、充分に立派な建築家であったといえる。その建築家の仕事もある意味、街並みをつくることではむなしさも感じていて、この先を絵の世界で生きると決心したとのことであった。

この横幅 6.5 メートルもある大きな南三陸町の瓦礫の惨状の絵を見るならば、人類が生み出すものには業 (ごう) のようなものがあり、防災庁舎の残った３階建ての鉄骨スケルトンは自然災害とは言え予測不可能なものでもなかったと強く語りかけるものがあった。

この惨状は現在ではきれいに後片付けがされていて、残っていない。そのようなことは写真でも表現されるが､はるかに痛みというものがこみあげてくる絵であった。なんとも言えない構図の美しさはやはり「建築家の目」というものを持っていて、中西氏の真骨頂のように感じられた。

アトリエの中西氏 (制作中の南三陸町とその背後に理科大の壁画が見える)

なぜに画家になったのか？

順序が逆になったが、中西繁氏のプロフィールを紹介しなければならないだろう。昨年度第 14 回の坊ちゃん賞 (理窓会主催) を受賞したわけだが、氏の経歴を見るならば遅きに失した感が深い。

幼少の頃から画家になりたいと考えていたが、同時に画家では食べていけないのではとも思っていた。そこで神田生まれの少年は九段高校を卒業して理科大の工学部建築学科に入学した。当時は１年次に絵画の授業があり、裸婦のデッサン (４期生で終了) もあった。その絵画の豊島先生 (浜田稔先生の水彩の先生) に認められて、本格的に絵の勉強を始めた。最初からその才能が光っていたということであった。

学生時代に東光展に入選して以来、東急設計コンサルタントに属しながら 1982 年に日展に初入選をし、その後数々の展覧会で受賞してきた。そして会社を辞して画家の道一筋に絞った時に､2001 年日展において､『棄てられた島』で特選となり、その道が開けた。

それを機会に 2004 年フランスのエコール･デ･ボザールで学ぶことを主な目的として、２年間パリ留学を果たした。その間の 2005 年やはり日展において『DOCK』で二度目の特選となって「日展委嘱」となった。この「日展委嘱」とは常時出展を認められた画家で、中西氏を含め 20 人しかいないとのこと、日展の審査員になるのも時間の問題ということである。実に素晴らしい快挙といえよう。その他には当初からの東光会の理事、常任審査員の経歴となっている。

『棄てられた島』は長崎市端島のことで、通称「軍艦島」と呼ばれる風や波浪にさらされて来た炭鉱の廃墟であり、氏の言葉では骨董品のような美しさを持つものである。また､『DOCK』は東京都江東区豊洲にあった、取り壊された造船所のドックで今はショッピングセンターとなっている。これらの作品の主題は氏の言葉では「時間の変化」を表現するもので、建築家らしい厳しいまでの構図と色彩は、それを見る者に様々な感情と思いと時間の経過を喚起するものとなっている。

パリではゴッホが住んでいた部屋で暮らしたこともエッセイとなって発表されている。2006 年に帰国してから現在まで、日本各地で展覧会を催し、同時に講演会を開催して、絵画を披露するだけではなく人類の未来へも発言している。それは、建築の設計だけでは満足出来ない人類や都市への思いがあるように筆者には見えた。(経歴詳細は文末のホームページ参照のこと)

坊ちゃん賞の経緯と葛飾キャンパスの壁画制作

坊ちゃん賞の受賞の経緯は、理窓会のなかの博士号を取得した人々の集まりである「博士会」の会員の推薦によるのだが、ひとりの大学教授の会員が老後の楽しみに絵画を習い始めたところ、その絵画の先生から理科大卒業の素晴らしい画家がいると教えられたところからであった。

壁画の依頼は坊ちゃん賞受賞以前に、建築学科の OB の紹介で塚本理事長がアトリエを訪れたところから始まっている。葛飾新キャンパスの文化交流施設である図書館・ホール棟の壁画を依頼されたのだが、最初に理事長は『夜明けのブダペスト』(7.2×2.2m) という作

品が大いに気に入られたそうで、是非に購入したいとなったが、残念ながらこれは売れてしまっていた。

結果的に『ストックホルム夕景』(9.8×2.6m) に決まったが、これには塚本理事長の思いがあった。スウェーデンの建築家エストベリの傑作ストックホルム市庁舎はノーベル賞授賞式の会場となる場所で、理科大からノーベル賞受賞者を輩出することを悲願とする理事長はそのストックホルム市庁舎を掲げることを思いついたようだ。

そこで、新たに描かれるものはストックホルム市庁舎がメインとなるものだが、制作中で全貌はお楽しみということである。飾られる場所はホールの中央になることは、その意味から言っても確かであろう。

あとがき

5期の筆者はひとつ後輩で、武井研究室も同じ、建築研究会などでも交流があり、昔から中西さんを知っていたわけです。中西さんの飾らない性格は坊ちゃん賞の受賞の経緯からみてもシャイな人柄をしのばせるものでしょう。取材終了後、アトリエから関内に移動して、氏の行きつけの「中国食堂」で旧交を温めさせて頂きました。筆者も設計をメインにしていましたが、現在では大学で教鞭を取っていますので、話は文明や時間や絵画論などに飛んで、楽しい時間を過ごさせて頂きました。

店の前で記念撮影

中西さんは静かな内にも気力と体力に溢れていると実感させ、今後の活躍を大いに期待できると思いました。多忙の中時間をさいて頂きありがとうございました。あらためて感謝申し上げますと共に、今後のご健勝を祈念したいと思います。 (野田正治＝Ⅰ部1970年卒)

(中西繁氏ホームページ)
NAKANISHI Shigeru ART GALLERY
http://www7b.biglobe.ne.jp/nakanishi-art/

2月18日(土)に第2回理科大83会を開催しました！

理科大83会とは…

2011年東北地方太平洋沖地震で1983年入学同期の実家が被災したことから、義援金を募ろうというのがそもそものはじまりでした。発起人の方たちが、賛同者を募りながら仲間に送る同報メールの輪が広がり、現時点で1983年建築学科入学者74名のネットワークができました。

このネットワークを活かそうという雰囲気はどこからともなく生じて、第1回理科大83会が昨年5月14日に神楽坂にて開催(27名出席)されました。そして今回第2回開催(25名出席、初参加者8名)の運びとなりました。

特に、会長がいるわけでも、会則があるわけでもありませんが、幹事を引き受けて下さる方々のおかげもあって、2回の同期会を開催することができました。

20数年ぶりに会った仲間の一言ずつ(では済まなかったかもしれない) 挨拶と久しぶりの会話であっという間の3時間（で済まなかった人もたくさんいました）でした。また、実家被災のため前回出席できなかったK氏より、義援金のお礼と義援金の一部を震災遺児のために寄付したいとの報告がありました。

(戸澤正美＝Ⅰ部1987年卒)

2月18日　神楽坂　理窓会倶楽部にて

平成24年会費納入のお願い

現在、平成24年度の会費の納入をお願いしております。同封の振込用紙にて、お振り込み下さい。

今後のさらなる築理会発展のため、多くの方のご協力をお願いします。

年会費　3,500円
加入者名　築理会
口座番号　郵便局　00110－5－171952

「編集後記」

工学部および建築学科が創設50周年を迎えました。私は21期なので、いつのまにか後輩たちの方が多くなってしまったわけです。今号では自分の子世代の現役学生さんから大先輩まで、縦横無尽に活躍している様子をたっぷりうかがうことができました。ほぼ同世代の83会も刺激になります。来年は葛飾キャンパスで建築学科の50周年記念行事を検討中とのことで楽しみです。

(安達功＝adachi@nikkeibp.co.jp)

築理会報2012春号
2012年4月発行　Vol.49
発行所　：東京都新宿区神楽坂1-3
東京理科大学工学部一・二部建築学科
築理会事務局　会員問合せ　chikurikai@gmail.com
FAX　03-5213-0976
編集長　：安達　功
編集委員：石神一郎、大岩昭之、野田正治、藤森正純、荒井眞一郎、広谷純弘、増村清人、森清、伊藤学、松浦隆幸、山名善之、平賀一浩、栢木まどか、深野有紀、大槻尚美、野村奈菜子
印刷発送：グローバルシステム株式会社